

# 陳舜臣さんを語る会通信

No.149 Jan. 2026

発行 兵庫県明石市北朝霧丘2-8-34

橋雄三方「陳舜臣さんを語る会」

Tel. 078-911-1671

編集 「陳舜臣さんを語る会通信」編集委員

発行日 2026年1月1日

## 陳舜臣さん自作の漢詩集『澄懷集』と詩話『麒麟の志』

本号では、No. 148に続いて陳舜臣さんの自作漢詩集『澄懷集』（愛蔵版 1986 成瀬書房）と詩話『麒麟の志』（1993 朝日新聞社）を取り上げました。

### 『澄懷集』「あとがき」

陳舜臣さんの本で自筆の原稿がついているものは少ない。そういう意味で、『澄懷集』の「あとがき」全文転載しました。

### あとがき

漢詩は平仄や韻など約束ことが多いが、じつはそれがかえって情感の通じ路を踏みかためる効果があり、自分の想ひが、ふしおなほすなれば表現されてしまう。これは作つてみて、自分で驚いたことだ。私がどうぞき漢詩を作るのは、だくな自己確認の作業の一つとしてである。誰のためでもない。

明治以前、漢詩に親しむのは、日本の知識人の必須の教養であり、それがいに愛好者も多かつた。だが、近代化に従つて、その伝統は薄くなり、新聞の漢詩欄も、大正期にはすまへた。愛好者がほんとうになくなつたのである。したがつて、私は漢詩を作つても、公けにすることを考えたことはなかつた。

一九一四年、還暦を迎えるにあたつて、私はプレゼント用に、私家版の漢詩集をつくり、『風雲集』と題した。本書とあわじ自作自註



『天空の詩人 李白』  
(講談社)表紙

『風雲集』以後の二年—甲子（一九一四）と乙丑（一九一五）の作である。応酬の詩が二首、乞われたのが一首あり、あとほんとに贈られたのでもなく、折にいれて、仕事の合間に作つたもので、ほとんどすべてが「偶成」である。よつた。

司風雲集は、この二年—甲子（一九一四）と乙丑（一九一五）の作である。応酬の詩が二首、乞われたのが一首あり、あとほんとに贈られたのでもなく、折にいれて、仕事の合間に作つたもので、ほとんどすべてが「偶成」である。よつた。

このときのあとがきにも述べたが、作風の変遷風景は公開すべきものとかもう、このたび成瀬書房の成瀬隼人氏から、その後の作品を編んでおきますのうえ、あたり考えて、おけすることにした。

で、古くから例はあるが、自取加はいるのは、これまで行き過ぎと「うらがす」というのがある。しかし、これはやむをえないとおもう。『風雲集』は、のちに平凡社の徳徳によつて公刊版を出したが、もちろん部数は限られた。

このときのあとがきにも述べたが、作風の変遷風景は公開すべきものとかもう、このたび成瀬書房の成瀬隼人氏から、その後の作品を編んでおきますのうえ、あたり考えて、おけすることにした。

で、古くから例はあるが、自取加はいるのは、これまで行き過ぎと「うらがす」というのがある。しかし、これはやむをえないとおもう。『風雲集』は、のちに平凡社の徳徳によつて公刊版を出したが、もちろん部数は限られた。

■『澄懷集』は百十三部しか発行されておらず、まず、私の目に触れる事はないと思っていたのですが、幸いなことに、『天空の詩人 李白』に甲子篇、乙丑篇併せて収録されています。

## 『澄懷集』目次 及び 卷頭の一首「澄懷」

澄懷集 甲子篇

冬至	算命曲	冬至	飛天	再游敦煌	老虎	米列舊居	敦煌文物	威尼斯	※ベネチア	北野町	履影	魚文頌	兵馬俑歌	南無觀世音菩薩	喜張和平君還鄉	泉州開元寺	畲族福湖村	杖鄉年	澄懷
※は加筆																			

澄懷集 乙丑篇

迎春	畫花郎	賀婚	和范會先生韻	別館牡丹園	翡翠	甲子同年	哈費茲廟	※ハーフイズ(詩人)廟	游普陀山	和王安石游洛迦山韻	廈門	和從維熙先生韻	歡喜歌	逆旅	托鉢	刺舌	惠理	示左其	※は加筆

『澄懷集』卷頭の一首「澄懷」

## 澄懷

澄懷默稿數離憂  
耳順那甘章句囚  
天外孤蓬常舉踵  
欄中老驥尚昂頭  
胸間薄膜存餘悸  
腦底殘筋耐激流  
潑墨江湖呵凍筆  
展箋編錄百春秋

## 澄懷

懷いを澄めて黙稿すれば數憂に離る  
耳順那甘章句の囚に甘んぜん  
天外の孤蓬常に踵を挙げ  
欄中の老驥尚お頭を昂ぐ  
胸間の薄膜は余悸を存し  
の底の残筋は激流に耐う  
墨を江湖に潑き凍筆を呵し  
箋を展べて編錄せん百の春秋

◎澄懷 六朝の画人宗炳(三七五—四四三)は年老いて名山に遊ぶことができなくなつたとき、「唯當澄懷觀道臥以遊之」(唯だ當に懷を澄まし道を觀、臥して以て之に遊ぶべし)と言つたと伝えられている。(『宋書』宋炳伝)

■『風騷集』の卷頭の一首「回顧」がそうだつたように、この『澄懷集』卷頭の一首、「澄懷」を読めば題名の意味が分かります。

のなかの老いたる名馬も、曹操の詩に「老驥は櫨に伏すも志は千里に在り」というように、昂然としているものだ。わが胸の薄い膜にまだ残んのときめきがあり、わが脳がまだはげしい流れに耐えうるうちに、さあ、この人の世の舞台に墨をふりかけ、凍つた筆に息を吹きかけ、原稿用紙をひろげ、ここ百年のことどもをかきとめよう。

画人李可染先生が来日したとき、「澄懷觀道」の四字を揮毫してくださつた。こころをきよめてすべてを觀よ。文章も書画もおなじである。こころをきよめて稿を練ると、しばしばこれでよいのか、という気もちになる。六十になつたが、文章の字句の囚人にだけはなりたくない。遠くまで飛ばされた一本の根なし草になつても、地にかかとがふれるかぎり、高く伸びあがつて、希望を失うまい、柵

道」の四字を揮毫してくださつた。こころをきよめてすべてを觀よ。文章も書画もおなじである。こころをきよめて稿を練ると、しばしばこれでよいのか、という気もちになる。六十になつたが、文章の字句の囚人にだけはなりたくない。遠くまで飛ばされた一本の根なし草になつても、地にかかとがふれるかぎり、高く伸びあがつて、希望を失うまい、柵

## 『澄懷集』「泉州開元寺」、「別館牡丹園」補足

『澄懷集』所収の「畲族福湖村」と「喜張和平君還郷」の2首はいずれも、司馬遼太郎『街道をゆく 25 (閨のみち)』にも記述があり、既に、No.148で紹介しました。このページでは、甲子篇の「泉州開元寺」と乙丑篇の「別館牡丹園」を取り上げます。なお、「恵理」と「示左其」、二人の孫を詠んだ二首を巻末に置いていているのがほほえましい。

こまかい雨のふりけぶる泉州開元寺を訪れた。宋代建造の東西両塔も雨にぼんやりとかすみ、春景色もまだかすかである。泉州は刺桐城とも呼ばれ、かつてはマルコ・ポーロが世界最大の貿易港とたえた。河が浅くなつたため、貿易港の地位を廈門(アモイ)に譲つたが、多年つちかつた風雅の伝統はいまも残つているようだ。四年前訪れたときは、弘一法師(李叔同)一八八〇—一九四二。上野の美校に学び、帰国後、出家し、泉州に没す)の金石作品(篆刻)展がおこなわれていたし、このたびは南曲を聴いた。三絃あり、二絃あり、月琴、胡弓、銅鑼、そして笛。しづかに、だが毅然として鳴る柏板。たおやかに、だが毅がはげしいものを訴えるかのようないいの日も耳からはなれない。おもいははてしなく、雨のかなたに消かけては、またつながつてゆく。清明の三日後のことだつた。



開元寺西塔(編集委員撮影)



桐城古刹雨霏霏  
双塔模糊春望微  
最是清明三日後  
時聽南曲思依依

桐城の古刹  
雨霏々  
双塔模糊として春望微  
最も是れ清明三日の後  
時に南曲を聴き思ひ依依たり

泉州開元寺

泉州開元寺

別館牡丹園

別館牡丹園

神戸元町老酒家  
得名豊艶牡丹花  
當壇四季調風味  
操俎無忘負鼎誇

神戸元町のふるい中華料理店は、ゆたかでやかな牡丹の名をとり、四季、その場で風味を調している。先代の王さんは、料理は人の心を近づけ、美味は王道を致すこそえできるという。俎を操り鼎を負う者の誇りを忘れなかつた。



上は、現在、別館牡丹園に掛かっている陳舜臣さんの書。七言絶句のあと、『史記』「殷本紀」の記述があるが、この部分については『澄懷集』にはない。

**伊尹負鼎(俎)の故事** ■ 伊尹(いいん)は殷の湯王に仕えようとしたが、つてがなかった。そこで、有莘(ゆうしん)氏の娘の嫁入りの時の付き人になって、鼎や俎を背負つてついて行き、うまい料理をつくって湯にとり入り、ついに湯に説いて王道をなしとげた。(『史記』「殷本紀」)

別館牡丹園主人王炳熾(おうへいしょく)氏は素と余と友誼至つて篤し。惜しい哉前年病を以て香港に卒す。菜館は嗣子に由つて之を継ぐ。生意仍お興隆す。

神戸元町の老酒家  
名を豊艶なる牡丹花に得て  
壇に当たり四季風味を調す  
俎を操り負鼎の誇を忘れる無し

## 『麒麟の志』 目次及び収録作品並びに補足

『麒麟の志』については前号(No. 148)で取り上げ、「まえがき」も、ほぼ全文掲載しました。『麒麟の志』は古希記念の詩集で、詩作年月からいうと、既に言及しました還暦記念の『風騷集』に続く10年ほどの作品が収録されています。また、目次は、甲子、乙丑、というように年ごとになっています。従って、自釈のほか、そこにエッセイを折り込んでいるとはいって、前半(目次の甲子及び乙丑)に収録されている約40首は『澄懷集』と重なります。従って、ここでは、『澄懷集』と重複する部分は省略し、それ以降について簡単に補足します。

湖畔	・ 湖畔	・ まえがき
		・ 甲子(一九八四)
		・ 乙丑(一九八五)
		・ 丙寅・丁卯(一九八六・八七)
		・ 雙珠燿
		・ 阿尼遺跡
		・ 馬刺孜墓遺跡
		・ 西冷橋秋瑾
		・ 橋山黃帝陵
		・ 西双版納
		・ 須磨寺有感 其一
		・ 須磨寺有感 其二
		・ 梶山季之十三回忌
		・ (溥傑 陳舜臣先生に貽る (これに和した陳舜臣の詩))
	・ 己巳(一九八九)	・ 戊辰(一九八八)
	・ 徐福研討會	・ 酬杜宣先生
	・ 左季描芍藥花	・ 祝新光貿易喬遷
	・ 題白峰僻村學校	・ 峨眉偶成
	・ 游北歐有懷	・ 登峨眉不見佛光
		・ 無題
		・ 題中國詩人傳
		・ 酉陳舜臣先生

目次の干支の下、カッコ内の西暦は加筆

其一	・ 其一	・ 普湖七月 ※ブルベス湖
		・ 芬京朝市 ※ヘルシンキ
		・ 不空羈索観音
		・ 良辨
		・ 谷川忘歸居
		・ 祝中華同文學校創立九十周年
		・ 庚午(一九九〇)
		・ 蘭亭芭蕉園
		・ 寄菊翁
		・ 六十六歳
		・ 忘歸居初夏
		・ 含笑花樹
		・ 忘歸居偶成
		・ 含笑苑晚景
		・ 寄河上民雄氏
		・ 漢陽研討會
		・ (威尼斯ベネチアにて)
		・ 人生七十近來多
		・ 嘘了飽聽長恨歌
		・ 掃破五胡爭霸策
		・ 跳噴八路戎衣波
		・ 長牆劈裂黃梁夢
		・ 巨像崩頽赤幟過
		・ 莫道流雲千里遠
		・ 麒麟志在崑崙河
		・ 古稀、感有り
		・ 人生七十近來多し
		・ 嘘了す長恨歌を聽き飽くるに
		・ 掃破す五胡の爭霸の策
		・ 跳噴す八路戎衣の波
		・ 長牆劈裂せり黄梁の夢
		・ 巨像崩頽して赤幟過ぐ
		・ 道う莫れ流雲千里遠しと
		・ 麒麟の志は崑崙の河に在り
		・ 蒙古行
		・ 銀山鐵壁
		・ 和張虎生先生韻
		・ (高良倉吉氏に寄せた二首)

■ 本書の題名は、右にあげた 「古希有感」其二の最終の 句からつけられた。	麒麟の志 陳舜臣	峰影層層翠障圍 清陰洗暑暫忘歸 谷川鄉裏披襟坐 舉目浮雲向我飛
	道う莫れ流雲千里遠しと 麒麟の志は崑崙の河に在り	峰影 層層たり翠の障圍 清陰暑を洗いて暫く帰るを忘る 谷川鄉裏に襟を披いて坐り 目を挙ぐれば浮雲我に向つて飛ぶ



朝日文芸文庫表紙

「己巳」年の一首「谷川忘歸居」

このころ、兵庫県氷上郡山南町の谷川に、ささやかな仕事場をつくった。仕事場というよりは休息のための山荘というべきかもしれない。：：。次の七絶をつくり、詩句にちなんで、「忘歸居」と名づけることにした。

「己巳」年の一首「谷川忘歸居」